

意見陳述書

2019年10月17日

東京高等裁判所民事第10部 御中

原告 鴨下祐也

最初に、この法廷で、意見陳述の機会を頂いたことに、深く感謝申し上げます。

私は、原発事故以前は、妻と、当時8才と3才だった二人の息子と共に、福島県いわき市の自宅で、高等専門学校の准教授として働きながら、のどかに暮らしていました。しかし、東日本大震災の直後、原発事故の危険性を感じ、避難を決めました。激しい余震が続く中、ろうそくの明かりで荷造りをし、夜明けを待って車を出しました。幼い息子たちは、3つしか持たせてやらなかったおもちゃを抱きしめて生まれ育った家を離れ、以来、8年7か月を経過した今も、東京で避難生活を続けています。

2011年4月、勤め先の業務が再開されたため、私は避難中の妻、子を東京に残し、福島に戻りました。

当時、市の発表では「いわき市は被曝していない」ことになっていました。「放射能は笑っていれば来ない。心配する者が病気になる」という不可解なメールが拡散され、ラジオは「復興の妨げになっているのは放射能を怖がる心です。」と連呼していました。

そして、2011年4月の初め、いわき市内の小中学校が一斉に再開されることになりました。学校からは、「子ども達に教育を受けさせる義務を放棄してはならない」と、連絡が入り、多くの子どもとその家族が、まだ線量の高かったいわきへ呼び戻されました。

私は線量計の測定値を元に、多くの放射性物質が、土ほこりと共に、校舎の外外に降り積もっていることを突き止めました。私は、この大量の放射性物質を、久しぶりに登校した子どもたちが大掃除をして吸い込んでしまうことを避けるため、せめて大人たちでこれを除去できないかと、小中学校や教育委員会へ赴き、使い捨てのモップや雑巾で床や机を拭くだけで、子ども達が放射性物質を肺に吸い込む危険を大幅に軽減できることを伝えました。

しかしその努力も空しく、実際に除染を実践してくれたのは、息子が通っていた小学校だけでした。こうして放射性ヨウ素を含む最も危険な最初の除染は、被曝を避けるすべを持たない小中学生の手によって行われてしまいました。とても無念でした。

私は、原発事故の9年程前から、屋上でおいしい野菜を水耕栽培する研究をしていました。2011年5月、不安はありましたが、学生達の熱意に動かされ、校舎の屋上で実験を再開しました。念入りに除染したプラントと清浄な水。しかし収穫した野菜は汚染しており、私は、いわきでの研究を断念しました。共に研究してきた学生達にも、辛く、悔しい思いをさせてしまいました。これが、「汚染されていない」と宣伝されていたいわきの現状でした。

原発事故後の福島には、避難区域の外であっても、放射線管理区域に相当する線量の場所がたくさんあります。放射線管理区域といえば、大学の研究室であれば、専用の白衣、被曝量を測るバッジを身につけ、実験機材を洗った排水も専用のタンクに保管し、放射線量が下がるまで下水などには流せない。然るべき安全管理のもとで慎重に業務を行うべき場所です。

ところが、原発事故後の福島では、そこで人々が生活しており、食事も育児もしています。1平方メートル当たり数万ベクレルを超える土の上で、子どもたちが泥だらけになってスポーツをし、草むしりをするというのは、本来あるはずのない状況です。実際、学生たちに渡された線量計の数値は、屋外で部活動を行う学生が明らかに高い数値を示していました。私は、実測値や文科省が公表しているデータを元に、危険を軽減する方法を提案してきました。しかし、その行動自体が誹謗中傷の対象となっていました。

この様に、嚴重に管理されるべき放射性物質が、風に乗り、雨となって降り注ぎ、その汚染された地に沢山の人が取り残されました。水も空気も食べ物も土も酷く汚染しているのだから、被曝から身を守るために、やむなく住み慣れた地を離れた私たちを、国は勝手に区域内避難者と区域外避難者、いわゆる自主避難者に線引きしました。今も被曝回避のために避難を続けている点では、私たち区域外避難者は何ら区域内の避難者と区別される理由はありません。

職場では、震災後、業務の負担が増え、連日深夜まで勤務が続きました。

そんな中でも、私はなんとか休みを捻出しては、家族に会いに夜の高速道路を飛ばしました。深夜の常磐道は、私と同じように家族の元へ向かう父親達の車が、何台もふらふらと走っていました。誰もが、妻子に会いたい一心で、疲れた体にムチ打って車を走らせていたのだと思います。

私も無理が祟ったのか、避難所から福島に帰る途中で、事故を起こしたことがあり

ました。深夜の首都高速で、路面のオイルに気づかずスリッパし、横転しました。幸い、命に関わる怪我はありませんでしたが、乗っていた軽自動車は廃車になるほど激しい事故で、24年前に免許を取って以来、これが初めての事故となりました。

こういう経験をしたこともあり、同じく二重生活を送っていた妻の友人が、類似した状況で他界したことを知った時は、本当に人事ではなく、言葉がありませんでした。

そんな私の苦勞を知っていたのか、息子たちは、私の前では決して涙を見せませんでした。しかし、母子だけでの避難生活が、染だつたはずもありません。

当時8歳だった長男は、「帰りたい」と、ぐずる弟の口を塞ぎ、黙って涙をこぼしていました。また、スズミにバイクを向けられ、「福島に帰りたい？」と聞かれた時は、うつむいたまま、「聞かないで」と答えたそうです。たまに会う息子達は、別れの時はいつも元気に手を振り、その笑顔をバツクミラーに見ながら、私は福島へ戻ります。しかし、車を見送った後の次男は、布団に駆け込んで泣き続けていたのだと、後になつて妻から聞きました。4歳の子どもが布団に潜り、声を殺して泣く姿と、その息子を抱きしめて、「ごめんね」としか言えなかつたという妻の言葉に、胸が締め付けられる思いでした。

幼い息子が父親を求める時期は長くはありません。その貴重な時を、息子たちと共に過ごせない悔しさが込み上げました。

しかし、放射性物質が依然、宙を舞い、その正確な情報も伝えられず、十分な除去作業も行われないわきに、息子たちを連れ戻すという選択は、どうしてもできませんでした。

子どもたちは、慣れぬ避難生活と家族分離のストレスで、しばしば体調を崩しました。私自身も体調を崩し、職場の人間関係の悪化や、放射能汚染による研究の断念、さらに、家族が離れて暮らす歪みに耐えられなくなり、2012年の秋、定年まで勤めるつもりだった仕事を辞め、東京へ避難しました。今は家族4人、都内で暮らしています。

しかし、周りを見れば、今も沢山の子どもが、放射能の脅威を避けるために、親と離ればなれの生活を送っています。また、私と同じように父親が仕事を失った家庭や、避難を巡って、いさかいの絶えない家庭も少なくありません。

また、福島では、多くの分断が生まれています。空間放射線量や賠償金の額、原発からの距離など、どれも個人には責任のないことに、一方的に線引きをされたことがきっかけとなり、怒り、憎しみが生まれ続けています。ただの自然災害ならば起きなかつた深い溝が、県内に幾重にもびこっています。

私たちは、みなし仮設住宅として提供された国家公務員住宅に暮らしていますが、その住宅は、再三の要望や署名を提出したにもかかわらず、2017年3月で提供が打ち切られてしまいました。しかし、今でも避難元の家には、放射線管理区域の基準を超えた土壌汚染があり、被曝の危険があるために帰ることができない人がこの訴訟の原告にも多くいます。私もその一人です。今、国は自らの手を汚さずに、都内の国家公務員宿舎に住む避難者のうち5世帯だけを選んで追い出しの訴訟を福島県に起こさせようとしています。突然、生まれ育った福島県から提訴されることを知った若い母親は、恐怖に震え、泣き崩れました。

私達が住んでいた街は、緑がとても美しいところでした。春には山菜が芽吹き、夏は岩魚が釣れ、秋にはキノコが採れます。仕事帰りの父親は、海岸でアライナスを釣り、晩の食卓を飾ります。決して豊沢ではなく、それが当たり前だった福島。その豊かさの全てが、放射能汚染によって奪われてしまったことを、今も悔しく思います。

事故当時小学生だった息子は高校生になり、北海道に行ったとき、大自然を前にして『自分が失ったものが判ってしまった』と涙を流しました。福島の豊かな自然は、息子達が無償で継承できるものであったはずですが。しかし現実の息子は、避難児童として東京で育ち、同級生からのいじめに苦しみ、今でも当時のトラウマから体を壊し、眠れない日々を過ごしています。

失われたものは取り返すことはできません。しかし、今なお続く放射能の脅威から、子どもたちを守り、避難を望む人が堂々と避難できるようにすることや、新たな事故からこの国を守ることはできません。

裁判官のみなさん、この国土にバラまかれてしまった放射性物質の寿命は、私たちの寿命よりも長いのです。ですから私たちは、自分たちが生きているうちには、もう元通りの生活が手に入らないことも知っています。しかし国は、あたかも汚染が元に戻ったかの様な、誤ったイメージを発信し続け、私たちの被害を否定しようとしています。更に、低線量被曝が安全であるかのような誤った知識を流布することで、避けられる被曝からの回避手段さえも、奪っているのです。

ですから、どうか、私達が被曝させられてしまった事実を認め、これ以上無用な被曝を強いられない生活を保障してください。福島に生まれ育ち、離れても尚、福島を深く愛する子どもたちを、思い遣ってください。そして、このような悲しみと苦しみの中にある私たちの叫びに、耳を傾けてくださいますよう、どうぞ宜しくお願いします。

以上